

山崎丈夫編著『大震災とコミュニティ』

お世話になった山崎丈夫さんが亡くなった。突然の知らせに驚くとともに、残念でならない。「追悼の言葉」を書くために、山崎さんの著作を手にとった。今からちょうど10年前に自治体研究社から出版された写真の『大震災とコミュニティ』の「はしがき」冒頭と最後に、山崎さんは次のように綴っている。追悼の気持ちをこめて紹介したい。

なんとということが起きてしまったのか。2011年3月11日午後2時46分、東日本を襲ったマグニチュード9.0の大地震とそれに伴う巨大津波は、想像を絶する被害をもたらした。とくに沿岸部では、「津波てんでんこ」（それぞれが急いで高台に逃げる）の様相が呈され、人びとは身を守るために安全な高所を求めて避難した。

しかし、地震・津波による犠牲者の総数は、死者・不明者2万4186人(5月17日現在)に達した。阪神大震災(1995年1月17日)とは、規模も質も何倍も大きい大地震の前に、膨大な数の命、財産、働く場、地域コミュニティを喪失した。烈震は建物崩壊とそれに伴う人命を奪ったが、津波被害は、生命・財産とも壊滅状態をもたらした。

しかし、私たちには、福島第1原発事故被害も加わって、戦後最悪とってよい大災害のなかから立ち上がろうとする人びとへの支援・救援の態勢を強め、どれだけしっかり寄り添うことができるか、が問われている。行政と人びとの力が今こそ試されている。危機を乗り越える力の源泉は人間の絆である。

被災地では、未だ多くの人びとが避難所生活を続けている。避難所での生活は、通常2~3週間が想定されているが、それが既に2~3カ月も続く状態は閉塞感を強めている。一方で、避難者の離散もすすみ、避難所でもその実態がつかめない状況がある。仮設住宅への入居も開始されているが、避難所で不安や不便を共有して、「仲間」としてのつながりのなかで暮らしてきた人びとも、そこを引き払ううごきがでてくるなかで、戻る場所のない避難者の孤立感が深まっている。避難所では、妻と一緒に高台に逃げていて、振り返ったらその姿が見えなくなっていた人や子どもと一緒に逃げていて、津波の強さで子どもの手を放してしまったというような現実に壮絶な体験をした人びとが集まって暮しているのである。

大災害からの復興過程で真に目指すべきことは、人間の復興であり、人間が集合する地域コミュニティの再興である。それが、大震災で露わになった、人間と人間、人間と自然、人間と企業との関係の再構築というこの困難なテーマに向かい合っていける確かな道である。

いま、われわれには、コミュニティの総力を挙げた地域の維持・存続のための新たな出発が求められている。



(2021年6月24日)